

沖縄県読谷村における地域教育の試み —読谷村楚辺区における地域交流事業を事例として—

春日 清孝

1. はじめに

本論は05年にたちあがった、明治学院大学社会学部付属研究所特別推進プロジェクト「沖縄的なるものの変容—伝統と創造のハザマ—」と、その後における「沖縄の共同体の可能性—沖縄県読谷村の“平和と自治の地域づくり”—」研究グループの中間報告である。厳密に言うと本論は、筆者が沖縄、特に読谷村に関わりだした97年から継続的に行ってきた調査の成果でもあることをお断りしておく。因みにワーキンググループにおける筆者の担当は「地域における子どもと教育」であり、地域文化の維持、継承の諸相について、単なる数量調査ではなく踏みこんだ質的な調査を行うことである。

特に本稿では、学校ではなく、地域が主体となって展開する教育の実態について検討してみたい。言い方を換えれば、読谷村における「地域の教育力」の現状と展開である。

一般に、首都圏や都市部においては、教育の比重が「学校教育」に傾きがちで、それに比して「地域の教育力」という考え方は一定に評価されつつも、具体的、実践的な取り組みが積極的にとられてきたとは言いがたい。逆に、「地域の教育力」を実体のない単なる理想と見るなど、どちらかといえば否定的な評価が多かったように思う。

しかしながら、「地域の再編」が声高に求め

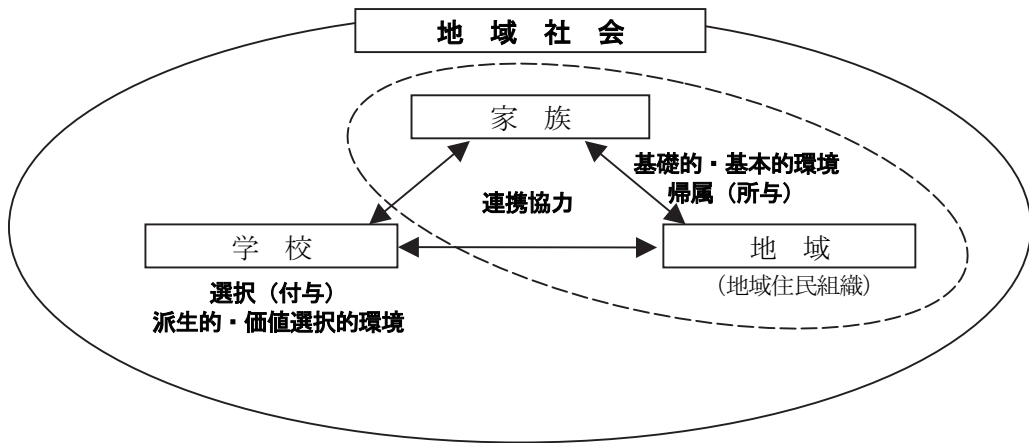
られる今日において、「地域づくり」や「人材養成」という、広義の「教育」が各地で組み込まれたこともまた事実であろう。徒に過大評価、過小評価をするのではなく、将来的に生活圏を検討するためにも、ここでは具体的な地域の取り組みに目を向けておきたい。

2. 地域教育

読谷村を初めとした沖縄における地域共同体では、程度の差こそあれ、それぞれの地域性と共同性がいまだに引き継がれているところが多く、そこでは次世代を担う子どもや若者をどのように育てていくかということが話題にのぼることが多い。沖縄に限らず、近年「地域の子どもは地域で育てる」ということばをよく聞くようになり、そのような取り組みを行う地方公共団体が全国的に増加しているが、これは地域教育の展開と見て良いであろう。

「地域教育」とは、いまだその定義が確定しているとは言い難いが、岡崎はこの地域教育に積極的に取り組んでいる京都府の事例を挙げ以下のようにまとめている。地域教育とは、学校ばかりではなく、地域共同体が子どもたちの教育に関与することであり、「地域の子どもは地域で育てる」という意識を地域に培う教育」である。その内容は、(1)地域の一員としての自覚と態度を育む(2)地域全体で子育てをする気運

図一 I . 教育環境の3分野 (岡崎友典『改訂版 家庭・学校と地域社会』放送大学, 2004 26頁, 図2-1に手を加えて流用)



を醸成する(3)地域の教育的機能を活性化し教育力を高める、を狙いとしている。(岡崎 2004)

この定義において重要なのは、いわゆる子どもの育成環境としての家庭、学校、地域社会の連携教育という、古くて新しいテーマを前提とした上で、「地域教育」を通じた「地域づくり」にまで言及しているところにあるといえる。この点において、「地域教育」とは単に「子ども」のみを対象とするのではなく、そこで生活するおとなたちも巻き込んだ重層的な試みであるといえる。

考えてみれば、子どもは家庭や学校でのみ育つわけではないのであり、しかもこのことは以前から半ば常識のように語られていたはずである。「群れの教育」と言われるように、子どもは家庭や学校などの特定の集団や機関の中だけではなく、様々な人間関係の網の目の中で社会化されていくものであろう。異年齢集団における教育の意義は行政的にも近年注目されつつあり、例えば「地域教育力再生プラン」などでもこの点は集中的に取り組まれている。

例えば、家庭・学校・地域社会の連携協力は図1のようにモデル化できるが、これが理想とされつつも未だに実現できていない理由はいくつかあろう。最大の要因として「学校」が地域

社会との関係を閉じてしまっているという指摘がよくなされる。葉養はこれを「学校抱え込みの子育てシステム」とし、それが現状に対応できなくなっていることを強調している(葉養 1999, 4 頁)。もっとも、家族についても地域との関係が疎遠になり、家族形態そのものも多様化しつつあると言える。何より、地域については「解体」「崩壊」という否定的なことばで括られてしまうほど、その在り様が「揺らいで」いる。

更に言うならば、上記3領域は個別的に扱われる傾向があり、それらの諸関係がどのようになっているのかはあまり問われてこなかったと言えるのではないだろうか。そのような領域／関係を客観的に分節していく発想の仕方と、生活者がそれらの領域を重層的複合的に生きているという事実とでは、問いの立て方と構造が異なるように思う。前者のように3領域を別個に見る視点は、そこを生きる個人にとって必ずしも重要ではない。というより、個々人が取り結ぶ諸関係によって自己と世界が形成されるなら、個人が生きる位相によって世界は異なってくる。住田も言うように、「地域社会において、子どもは性と世代を異にし、また同じくする見慣れた他人との相互作用によって多様な社会化を受

け、自我を形成していく」(住田 2001, 58頁)のである。

この意味で、地域社会における地域教育は、地域とそこで育つ個々人にとって重要な意味を持つと言えるだろう。地域においてどのような実践がなされているのか、この一つの試みとして読谷村楚辺区の事例を取り上げたい。

2. 読谷村楚辺区における試み—楚辺・宇田川地域交流事業から—

2-1. 地域の概略

まず、地域の基礎データを記す。

○読谷村楚辺区

読谷村は沖縄の中部(中頭郡)に位置し、総面積は35.17km²で、県下では18番目の面積を持つ。しかし村面積の5割弱は未だに軍用地であり、基地の占有比率は46.9%。村土の開発にとって重大な障害となっているばかりでなく、集落形態や居住形態に大きな影響を与えている。

村人口は37,836人で、総世帯は12,054。楚辺区は人口2,486人、総世帯775で、読谷村の行政区では2位の規模を誇る。(データは共に2004年)

産業的には、第1次産業:4.4%、第2次産業:23.6%、第3次産業:71.1%となっている。構成比で見ると第3次産業が中心で、その中でもサービス業従事者は40.3%となっている(2000年)。

読谷村の歴史は古く、もともとユンタンザ(読谷山)と呼ばれ、早くから開けていた。14世紀頃に中国(明)との交易で栄えたと記録に残る。琉球王朝時代には読谷村に番所がおかれ、交通の要所として文物の交流も著しく、重要な地域だった。

特に楚辺区には、沖縄の三線の始祖と讃えられている「赤犬子」が祀られており、琉球古典音楽や島唄が地域を挙げて盛んに行われている。そのような芸能は、楚辺祭り、赤犬子祭り、そして村の祭りである「読谷まつり」では、発表、披露する場が与えられている。

地域活動も活発で、青年会(100人)、婦人会(203人)、子ども会(195人)、老人クラブ(258人)が、それぞれの活動を楚辺公民館を中心に活発に行っている(データは2002年)。

以下に平成17年度(2005年度)の楚辺区子ども会活動内容を示す。かなり活発に活動していることがわかりいただけると思う。参考として子ども会における「道ジュネー」の写真を示しておく(写真1)。これは活動報告で言えば9月に開催される「楚辺まつり」の「パレード」にあたり、子どもたちがエイサーを踊りながら地区の道道を練り歩いている風景である。エイサーは地区によって特色があるが、ここで子どもたちが踊るエイサーは楚辺区独自のもので、その指導には地域の大人たちがあたっている。言い換えると、伝統芸能の継承は地域において、地域の人々との関わりにおいて行われるということである。



写真1 子どもエイサー(道ジュネー)

子ども会の活動全般を詳細に検討するわけにはいかないのですが、ここでは活動報告で「冬の鳥取交流研修」と記されている、鳥取県米子市淀江町の宇田川地区との交流について取り上げたい。

補足として、一方の当事者である、淀江町についてのデータを記しておく。

○淀江町

平成17年に米子市と合併した。淀江町は鳥取県西部にあって東西8.2km、南北6.1km、総面積25.7km²、北は島根半島が長く突き出した美保湾(日本海)に面し、南に大山を望み、その東西には孝

研究所年報 37 号

平成17年度
楚辺子ども会 活動報告

月 日	活 動 内 容	備 考
4月1日 20日 24日 27日	子ども会活動始まる 執行部会 ゆうばんなた浜清掃 あけずの会と共にこいのぼりあげる 拡大委員会	こいのぼり祭りについて
5月1日 8日 11日 28日 29日	こいのぼり祭り こいのぼり片付け 執行部会 子ども会年会費徴収 子ども会年会費徴収	バーベキュー 1世帯1,000円 千羽鶴用折り紙配布
6月1日 5日 15日 21日 23日	拡大委員会 区民大清掃 慰霊祭千羽鶴づくり 執行部会 ガールスカウト（トリステーション）交流会 慰霊祭	ガールスカウト交流会・キャンプについて 小学校まで通学路 育成会会長・副会長・子ども3人
7月6日 13日 20日 22日～24日 27日	執行部会 キャンプについての説明会 ラジオ体操始まる 渡嘉敷島キャンプ 執行部会	渡嘉敷島にて
8月3日 4日 7日 11日 12日 22日 23日 24日	夏休み勉強会始まる 執行部会 区民運動会 もも・ココロ（まんが教室） 老人会との交流 書道教室 赤ちゃんふれあい体験学習 もも・ココロ（まんが教室）	毎週水曜日 桃原毅さん クラガー会 上地峰子さん指導 読谷文化センターにて 桃原毅さん
9月7日 8日 14日 17日～18日 17日	拡大委員会 楚辺祭りエイサー練習開始 執行部会 楚辺祭り 古堅中学校運動会	楚辺祭りについて バレード・余興・出店 字対抗リレー参加
10月2日 12日 16日 26日 27日 30日	読谷村陸上競技大会 執行部会 読谷村老人運動会 鳥取交流参加者募集開始 読谷まつりエイサー練習 字同級生対抗ゴルフコンペにて 鳥取交流チャリティーワンオン賞参加	小学生リレー参加 小学生リレー参加 読子連 アロハゴルフセンター
11月6日 8日 16日 22日 23日 30日	読谷まつり 鳥取交流参加者募集締め切り 執行部会 鳥取交流参加者父母説明会 グランドゴルフ看板作り 執行部会	読子連（エイサー）
12月2日 11日 17日 19日 25日	執行部会 チャリティーグランドゴルフ大会 クリスマス会 生年祝い・鳥取交流に向け余興練習開始 門松作り	区民運動場 集会室 地下駐車場
1月4日 5日 9日 11日 13日 15日 20日 23日	鳥取交流に向けてプレゼント作り 鳥取交流事前勉強会 生年祝い余興リハーサル 鳥取交流参加者父母説明会 鳥取交流事前勉強会 生年祝い 冬の鳥取交流研修出発（3泊4日） 冬の鳥取交流研修帰る	アメリカンフラワース（ハイビスカス）
2月6日 9日 11日 12日 24日	執行部会 冬の鳥取交流研修報告会打ち合せ 鳥取交流文集作り 冬の鳥取交流研修報告会 読谷村学びフェスタへ参加 楚辺・宇田川学びフォーラム	写真展示 楚辺公民館多目的ホール
3月1日 19日 28日 29日	執行部会 新一年生のつどい・子ども会総会 会計監査 育成会総会	

霊山（751.4m）の丘陵がゆるやかに広がる。

大山山麓に源を発する佐陀川、宇田川などの河川があり、特に宇田川地区はきれいな水に恵まれている。

耕地は町土の約3割。その大半は肥沃な沖積土で形成された水田地帯である。

総人口は9,364人、世帯数は2,577戸。

産業別構成比は第1次産業：12.8%、第2次産業：29.2%、第3次産業：57.8%である。

歴史的には縄文時代の遺跡が存在し（妻木晩田遺跡等）、かなり早くから開けていたと考えられる。また、上淀廃寺からは日本最古の寺院壁画が出土した。

2-2. 交流事業の展開

読谷村と旧淀江町との出会いは、1983年に遡る。当時「わかとり国体」の少年男子ソフトボール開催地として準備をしていた淀江町に、次期「海邦国体」での開催地となる予定の読谷村が視察を行う。それ以降、役場職員を中心に交流が始まり、1994年には読谷村楚辺区のこども会

21名が宇田川を訪ね、ここからこども会レベルでの交流が始まることになる。初回のみは宿泊施設を利用したが、その後第2回目からは民泊となっている。宇田川地区からは最初の年に児童交流団が編成され、36名が夏の読谷を訪ねている。その後、互いに無理のない交流を前提とし、楚辺区からは毎年1月のスキーを主体とした3泊4日、宇田川地区からは隔年で夏の海水浴を主とした3泊4日、それぞれ子ども20名と引率での交流が現在も継続している。

強調しておきたいのは、どちらも町村からの資金的な援助は受けておらず、地域の独自会計で行っていることである。例えば、先の楚辺区子ども会活動報告でも「チャリティー」と銘打たれているものがいくつかあったが、これは基本的にこの交流の資金に充てられている。楚辺まつりにおける子ども会の「出店」も同様である。

2-3. ヒアリングの概略

本論における参与観察及びヒアリングは長期にわたっているが、詳細は以下を参照。

○参与観察の日程

- ・2002年8月25日 読谷村楚辺（宇田川→楚辺、夏の交流第5回）
- ・2003年1月24日～27日 鳥取県淀江町（楚辺→宇田川、冬の交流第10回）
- ・2004年1月24日～26日 鳥取県淀江町（楚辺→宇田川、冬の交流第11回）
- ・2004年8月19日～23日 読谷村楚辺（宇田川→楚辺、夏の交流第6回）
- ・2005年1月21日～24日 鳥取県淀江町（楚辺→宇田川、冬の交流第12回）
- ・2006年1月20日～23日 鳥取県淀江町（楚辺→宇田川、冬の交流第13回）

○ヒアリング対象

- ・育成会引率者及び参加児童
- ・過去の育成会役員（主に「あけずの会」）
- ・初期の参加者（成人、就業した型を中心に）

1. 「自治公民館」の重要性

概略：住民の手で管理運営される自治公民館は、大人も子どもも出入りが自由な場所である。子どもにとってそこは、年齢や性別を異にした様々な人々と出会う場であり、また同時に怒られる

場所であり、家では許されないような、子ども自身による生活上の試しを行なえる場でもある。また、学校教育の規律とは異なった、生活のルールを学ぶ場でもあるということ。

- ・一回家に帰って、夕方の放送当番に併せて公民

館に行く。何にもやる事が無くても集まって、お茶とかしている。公民館には黒砂糖があるから。それで7時くらいまでいる。(初期参加者)

- ・公民館は老人会や婦人会など、他の人々と接する場所でもあった。(初期参加者)
- ・公民館に来ると、普段会わない老人会の人たちと顔を合わせる機会があり、その時に屋号などで自分のことを話したりする。そうすると、もう両親の名前が即座に出てきて、子どもたちも悪さができなくなる。そうすると違うところで会っても挨拶だけはするようになる。(役員)
- ・公民館は怒られる場所でもあった。家でも怒られるんだけど、地域の人に見られているね、ということ強く思う。(初期参加者)
- ・年上も年下も、人をたくさん知ることになるから、その分、(ここに来ている子どもは)大人であるように思う。(役員)
- ・大人の側も、子どもたちと本気でケンカする。その後、相手の親にフォローを入れることはするが、そのような関係である。(役員)

2. 地域における人材養成について

概略：資金づくりのために、運動会やお祭りその他のイベントに賛加する。役員が相互にアイデアを出し合い、話し合えるような関係づくりが重要とされる。大人の(子ども会育成会)役員ばかりでなく、子どもたちにも自分たちのアイデアを出させていく。このような働きかけによって、継続的に公民館に来てもらえるようにすることが期待される。一部の関係者ばかりでなく、できる限り周りの人々を巻き込んでいくことが構想されている。

- ・子ども会→ジュニアリーダー→青年会と、継続的に公民館に来られるようにしたい。公民館に気軽に、継続的に来て、宿題をしたり、本を読んだりするところからスタートさせたい。そして中学校になっても高校になっても、公民館はいつも皆がいるところという意識を持ってもらえれば、青年会になって、公民館は行きにくいところという意識は取り除けるのではないかと思う。いつでもおいで、と呼びかけて、実際にそうしてくれるれば、いろいろなお手伝いを頼み

やすいし、そうなれば青年会ももっと盛り立てていけるのではないか。ジュニアリーダーをつくったのは、子ども会を出た後の子どもたちが青年会に入るまでのつなぎが欲しかったから。(役員)

- ・余興とかバザーとかで鳥取に行くための資金稼ぎをしている。これを通して地域の人々にも協力を要請しつつ、このようなことをしているんだとアピールしていく。(役員)
- ・子どもたちの自主性をどこまで引き出せるかどうかが問題だと思う。(役員)
- ・大人が事前に手を回すのではなく、子どもたちにまかせてしまい、結果的に失敗したり、痛い思いをしたりすることもプラスになると思う。(役員)
- ・子ども会がすごく楽しかった。6年生の夏休みに一泊どこかに行こうという企画を子どもたちだけで立ち上げ、渡嘉敷島で鯨を見ようという企画を立てた。大人達を説得して行けることになったが、結局台風でダメになってしまったのがすごく残念だった。(初期参加者)

3. 学校との連携協力

概略：この交流事業は地域主体の取り組みであるが、そこに排他的に線を引いて自分たちだけの取り組みと固執しているわけではない。そうではなく、地域が主導しつつ、学校などを巻き込んで展開していくことが試みられている。このことについては教委や学校も、学校の「規則」を固守するのではなく、地域との関係で弾力的な運用(=連携協力)がなされている。

- ・行く前に事前学習をする。交流に行く子どもたちを対象に、鳥取県のことと、民泊の際のマナーを地域の小学校の教頭先生に、公民館に来てもらって話をしてもらう。(役員)
- ・宇田川に行くときは金曜と月曜を休むことになる。交流の要綱と子どもたちの名簿、申請書を教育委員会に渡し、伝統芸能や、文化交流などを勉強してくるので出席扱いにしてくれるように申請する。同様のものを小学校の校長に渡す。担任には欠席届を提出する。(役員)
- ・帰ってきたら早めに「文集」を作成し、学校と読谷教委、淀江教委、大山青年の家など関係各

所に渡す。(役員)

- ・その後、公民館で報告会を開催。村教委と学校、関係者を招待して(100人レベル)行う。敢えて、このように関係各位や教員に見せ、単に遊んできたわけではないと言うことをアピール。できる限り、周囲を巻き込むようにしている。(役員)
- ・先生方の反応はとても良い。報告会などで、先生と保護者との繋がりにもなる。(役員)
- ・できる限り、教委や学校の先生を現地に行く機会を増やし、そのように働きかけている。(役員)

4. 関係の伝承とバックアップ

概略：育成会の大人たちは、自分の子どもたちがこども会から離れると同時に役を退く。そのような経験者はそれきりになるのではなく、「あけずの会」という自発的につくったグループに入り、その後の交流事業やその他のイベントもサポートしていく。それはボランティアなもので、強いられるものではない。

- ・育成会経験者は、その後の育成会をサポートする「あけずの会」に参加していく。(役員)
- ・先方の引率など、大人たちの接待は、育成会にかわって「あけずの会」が引き取った。皆が育成会で苦勞してきた人達である。(役員)

5. 地域へのフィードバック

概略：もともとは子どもたちの交流であったものが、おとなたちの交流につながった。そしてそれは自分たちの地区ばかりでなく、他の地域へも波及しだしている。

- ・子どもたちが行くことによって、親の興味関心を刺激した。子どもや孫が行った地域に対する大人たちが興味を持ち、大人の交流がスタートした。現在、宇田川地区には楚辺区専用の田がある。(役員)
- ・自分の子どもたちがどのように接待されているのかを親たちにも知って欲しいので、意識して親を引率として行かせた。実際に親を連れて行くことによって、先方が来たときの民泊の受け入れ態勢が手厚くなった。(役員)



写真2 宇田川公民館前で

写真の雪だるまは2体とも宇田川、澁江町の大人たちが作った。それ以外にも様々な形で、大人子どもを問わず、地域の人々がサポートしている。交流事業は地域の人々のサポート抜きで語れない。

6. 子どもたちの体験(事例)

●交流事業について

- ・ただ、単純に内地に行ける、飛行機に乗れる、雪がみれる、ということがうれしかった。(初期参加者)
- ・一番最初に、「雪が降るところ？」と聞いた。実際に宇田川に行って、初めて雪を見た。大山青年の家で泊まった翌日、外が真っ白になっていて、みんなを起こして回った。雪が降ってくることに感動して、雪の写真をたくさん撮りまくった。(初期参加者)
- ・大人たちも一緒に大騒ぎをした。(役員)
- ・みんなから「いいなー」と言われた。「何で楚辺の人たちだけ」とうらやましがられた。うらやましがられたところは、何よりも友だちとどこかに泊まれる、という事だったと思う。村内でのキャンプとは違い、まったく違う土地に行って友だちと泊まれるというのが、自分でもワクワクした。(初期参加者)



写真3 空から降る雪

雪が積もっているのは見たことがある者がいたが、空から降ってくる雪を見たことがある者はほとんどいない。

●残った印象

- ・雪のこと。(初期参加者、参加者)
- ・作文を書かせたら全員が雪のことを書いていた。(役員)
- ・寒さのこと。思っていたよりも暖かかった。特に家の中は暖房がきいて、暑いぐらいだった。現地が寒いと聞いていたものだから、Tシャツなど一切もって行っておらず、どうしようかと。(初期参加者)
- ・大人も一緒。自分たちもコートを持っていったものの、一回も袖を通さなかった。肌襦袢などもつけていったものだから、暑さに往生した。それ以降、事前説明会では厚着について注意するようになった。(役員)
- ・びっくりしたのが、沖縄はこたつがあるのと聞かれたこと。
- ・蟹などすごいものを用意してもらった。沖縄では蟹のミソなど食べないのだが、良いところだからとわざわざ自分のために残してくれてたいへんだった。(初期参加者)
- ・ジュニア・リーダーで行ったとき、大人といっしょに行動することになり、途中の食事で鮎が出た。その時は大人も誰も食べていなかった。鮎は内臓を食べるといのがどうしても信じられない。鮎は川の底の藻を食べるからおいしくないんだと思う。やっぱり海の水の方がおいしい。親が投げ網でいつも新鮮な魚を取ってくるので、鮎などは、「これは魚じゃない」と思った。(初期参加者)
- ・朝ご飯に焼き魚が出てきたことがとても新鮮だった。漬物と、鱈の干物と、ノリとみそ汁など、

テレビの日本の朝食だと思った。(初期参加者)

- ・お湯に浸かるという経験がない。家には湯船というものがない。だいたい、人前で裸になる習慣が無い。お風呂は一人で入るものだと考えている。未だに抵抗感がある。(初期参加者)
- ・小学校の5年生の時に少年自然の家に行って宿泊学習があるが、その時に入浴についての指導がある。タオルははずす、パンツは脱ぐ、と指導されるのだが、最後まで入らない子どももいる。(役員)

7. 伝統芸能について

一方の地域での取り組みが他方を刺激し、相互作用でそれぞれの地域内／間の関係が積層していく。特に伝統芸能について、宇田川地区からの見方を紹介しておく。

- ・楚辺の子たちが郷土芸能を勉強しているので、見てくれる子ども会がないだろうかという話があり、そこから交流事業は始まっている。



写真4 楚辺区の獅子舞い

本土の獅子舞とは異なるが、沖縄ではこの形式が多い。作りは子ども向けに簡略化されているが、動きについては本格的。この獅子舞もエイサー同様、地域によって違いがある。

- ・宇田川青少年育成郷土芸能部というもの最近立ち上がった。もともとは沖縄との交流の10年に感謝してはじめたもの。さんご節という歌が本来の淀江の伝統芸能で、傘とか銭太鼓とかはあとからついてきたものである。淀江さんご節保存会にも協力してもらい、同時に沖縄の三線、獅子舞、歌、太鼓なども一気に募集をかけたところ、全てのジャンルについて、しかも大人からも募集があつて、一気に始まった。



写真5 淀江町の銭太鼓

これは宇田川地区の子どもたちが芸能交流で披露している風景だが、楚辺区でも長年の交流の成果か、銭太鼓ができる子どもも増えたという。

- ・宇田川青少年育成会郷土芸能部が立ち上がる以前は、子どもたちが公民館に来るきっかけがなかった。芸能だけではなく、常に何かに関わってくれるという形にしないと、したことがある、行ったことがあるで終わってしまう。その点、楚辺の方は、子どもを継続的に関わらせている。

3. 「地域教育」の可能性について

この交流事業は「地域」における実践であり、これが学校その他の諸機関と「どのように」連携できるかが重要であろう。

もともと、この事業は「自分たちの地域の子どもは地域で育てる」という観点から行われている。重要なのは、メンバーの選抜にあたって、学校的な評価基準とはある種異なった基準が採用されていることである。楚辺から交流に行く子どもたちは、勉強ができ、挨拶もしっかりとこなせるような、いわゆる学校的な「優等生」とは必ずしも限らない。

当初からここに関わった関係者によると、重視されていたのは、地域のことに取り組んでいくためには「外のこと」を知らなければならない、という問題意識だったという。「地域の子どもは地域で育てる」という文言は、聞きようによっては排他性、閉塞性をイメージさせやす

く、その点を注意する論者も少なくない（佐藤晴雄 2001）。しかしながら、ここに紹介した取り組みでは、自分たちが「自明」とする生活や文化とは異なった世界（差異）があるということに、まさに身をもって触れさせ、その上で自分たちはどうするのかという視点を養成していく、ということが主眼であった。自分の地域の伝統芸能はそのままであれば即自的なものとして流れさってしまう可能性が高いが、それを他者の視点を借りることによって対自化し、それへの取り組みを意識化させることがなされている。そのような生活体験（学習）を、学校のようにカリキュラム化し、「勉強」として行うのではなく、生活の延長線上で体験しつつ、その関係の中で社会化していくことに意味があると言えるのではないか。

もっとも、本報告においてはこの交流を立ち上げた「おとなたち」と今は成人した初期参加者を対象としたヒアリングが主となっており、現在参加している子どもたちがその体験をどのように受けとめているのかということの追跡が充分ではない。

地域社会の変容と再編成の問題、そして、地域で活躍できる人材の養成について、本論は地域による一つの試みを紹介したにとどまるが、その検証も兼ねて今後の課題としたい。

〔参考文献〕

- 葉養正明 1999『学校と地域のきずな』教育出版
- 岡崎友典 2004『改訂版 家庭・学校と地域社会』放送大学
- 佐藤晴雄 2001「第3章 地域社会の活性化と学校協同」白戸克己他編『学校と地域でつくる学びの未来』ぎょうせい
- 住田正樹 2001『地域社会と教育』九州大学出版会